

様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 15日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520767
研究課題名（和文） 新資料の激増に対応する初期銅鼓の全面的再検討
研究課題名（英文） An overall new investigation on early bronze drums: coping with the sharp increase in the number of new specimens
研究代表者
今村啓爾 (IMAMURA KEIJI)
東京大学大学院人文社会系研究科教授
研究者番号：70011765

研究成果の概要（和文）：

銅鼓分布の中心地であるベトナムでは、この15年ほどの間に第Ⅰ型式銅鼓の発見数が2.5倍に激増した。本研究はこの資料状況の激変への対応を試みたものであるが、現地では偶然発見された銅鼓の多くが海外を含む骨董市場に流れ、現地研究者でさえもその行方を追うことは困難という実情を知った。このため本研究は、新資料による概略の分布状態の認識、第Ⅰ型式におけるタイ・マレーシア等東南アジア南部の地域性、とくに鑄造技術の問題、紀年銘を有する資料と学史的重要な資料の精査、学史の再検討など、実行可能な課題に中心をシフトせざるをえなかったが、これらについては相当な研究成果をあげることができた。

研究成果の概要（英文）：

In Vietnam, where ancient bronze drums are most densely distributed, the number of discoveries increased to as many as two and half times during these 15 years. The original aim of this project was adaptation to this recent drastic change in material condition. We found, however, in the actual field, that most of the finds had flowed into antique market including overseas one and that even Vietnamese archaeologists could not know the actual owners. So, we were obliged to shift our target to practicable subjects; outline of the distribution of the recent finds, regional traits in the Heger I type especially that of Thailand and Malaysia and casting technique, minute investigation of the specimens with inscribed date and important ones in the history of bronze drum research. We could attain substantial results in these subjects

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総 計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：(1) 銅鼓 (2) 青銅器文化 (3) 東南アジア (4) 南中国 (5) 鑄造技術
(6) ドンソン文化 (7) 石寨山文化 (8) サーフィン文化

1. 研究開始当初の背景

銅鼓分布の中心地であるベトナムで 1990 年までに知られていた先 I 式・I 式銅鼓は 115 点であった。そして 1990 年から 2005 年までの 15 年間に新たに 179 点が発見され、資料数は 2.5 倍になり、さらに増え続けている。しかも上記のうちの 51 点は、それまで銅鼓分布の空白地域とみなされてきた中部・南部ベトナムでの発見であり、カンボジアでも発見数は増えている。これほど急激な資料状況の変化の中で従来の路線に沿って研究を続けることは不可能であり、本研究はこの資料状況の激変への対応を試みるものであった。

2. 研究の目的

しかし調査を開始してみると、現地の状況は我々の想像をはるかに超えるものがあり、地雷除去のために配布された金属探知機の使用によって発見された銅鼓のほとんどが、海外を含む骨董市場に流れ、現地研究者でさえもその行方を追うことは困難で、実際の出土数は上記の数字よりはるかに多いと考えなければならない。外国研究者がその保護に乗り出すことはまったく不可能で、ベトナム文化情報局に働きかけ、盗掘防止対策を要請することであるが必要であるが、広範な発見地から見てその実施はきわめて困難であり、実効は期待できない。この点に関し、2010 年 2 月 5 日にベトナム考古学研究所副所長のグエン・ザン・ハイ (Nguyen Giang Hai) 氏とタインホア省文化情報局局長ゴ・ホアイ・チュン (Ngo Hoai Trung) 氏の 2 名を日本の文化庁

記念物課に案内し、日本の文化財保護について説明を受ける機会を作ることができたのは、その第 1 歩としての意義があったといえる。

以上のような理由から本研究は、研究計画の中心であった新発見銅鼓の資料化をあきらめ、付加的な課題であった以下のものを前面に出すことにせざるを得なかった。— 確認された新資料による分布状態の概略の認識、第 I 型式のタイ・マレーシア等東南アジア南部における地域性、とくに鑄造技術の問題、紀年銘を有する資料と学史的な重要資料の精査、銅鼓の記載のある漢籍の研究、学史の再検討などである。それらについては以下項目別にあげるように相当の研究成果をあげることができた。

3. 研究の方法

研究は主に資料の存在する現地での調査と国内での資料整理、既発表研究文献との比較研究となった。現地調査は研究代表者と研究分担者が単独またはグループで行い、中国雲南省・中国北京市・ベトナム・タイ・イギリス・オランダ・フランスで行われた。上記のような理由から研究テーマが多様化し、個々の課題を個々の代表者・分担者が実施することが多かった。

4. 研究成果

(1) 新資料の検討

ベトナムの新資料の追求については、一部

個人の所有資料を検討できたが、上記のような理由から実物資料を追うことを断念し、ベトナム研究者の収集した情報や写真の提供を依頼することにした。しかし多くの資料は出土地点も明確でないため、考古資料としての価値には問題が残る。なお骨董市場に流出した資料には銅鼓以外にもさまざまな種類のものがある。

(2) 紀年銘資料の精査

銅鼓の変化や分布を歴史的な出来事と対応させるにあたり、各銅鼓と銅鼓型式を実年代に比定する必要がある。しかし考古学的方法からの年代解明には限界があり、銅鼓自体が紀年銘を有する資料が重要である。このような銅鼓はイギリスに2点あり、実物について調査を行った。ロンドンの Victoria and Albert 博物館所蔵第Ⅰ型式末期の銅鼓の銘文「建安四年八月拾五日造」は、後漢の西暦199年という年になる。紀年は陰刻なので、当然後刻を警戒しなければならないが、銅鼓型式と年代の間に矛盾はないと考えられる。また陰刻は母型の段階で行われており、鑄造後に刻まれたものではないと観察された。一方大英博物館に紀年銘を有する1点の第Ⅳ型式銅鼓(資料番号1903)があるが、その紀年銘は陽鑄で「建興四年七月工張富造」とあり、蜀の年号で西暦226となる。陽鑄であり、本体鑄造時に同時に鑄出されたものであるが、紀年と銅鼓型式はまったく符号せず、この年が諸葛孔明による雲南制圧の年にあたることから、おそらくは「三国志演義」諸葛孔明の陣太鼓説話に合わせて後世このような紀年を有する銅鼓が鑄造されたものと考えられる。

(3) 銅鼓編年と歴史上の出来事

今村はインドネシア東部の島々に分布す

る超大型銅鼓の年代を、自己の編年と比較考察し、それらが短期間にベトナム北部から運ばれた可能性が強いこと、その拡散の背景に歴史的イベントがあるとしたら、漢の武帝による南越国の撃破とベトナム地域の直接支配の確立というできごとである可能性が高いことを論じた(Imamura 2010、今村 2010)。

(4) 第Ⅰ型式内地域差の追及

視野を広げると、同じ第Ⅰ型式の分布内でも、東南アジア南部のタイ・マレーシアの銅鼓の一部にはベトナムと異なった文様が認められるものがあり、それらとインドネシアの銅鼓に類似の見られるものがある。地域差は、とくに鑄造技術において独特のものが見られる。

(5) 鑄造方法の検討

西村はベトナム、タイ、インドネシア、マレーシアなどで出土したヘーガーⅠ式銅鼓の鑄造痕跡を観察研究し、鼓面に注銅を行う湯口があることを明らかにした。また、その他の鑄造痕跡から、北部ベトナムと北部以外に分布するヘーガーⅠ式ともに鑄造技術に差異は全く無く、北部ベトナムで生産された銅鼓が東南アジア各地域に運ばれたことを論じた。また、それに並行してタイ・中部ベトナムなどで失蠟法による銅鼓の模倣生産が行われたことを明らかにした。(西村 2010) これは、南北地域のつながりと相違を明らかにした重要な成果である。

(6) 青銅素材の研究

当初予定した齋藤努による銅鼓の金属素材についての分析は、上記のような理由から出土地のわかる適当なサンプルが入手できなかったため実施できなかったが、東アジアの青銅器に含まれる鉛同位体比の分布に関

する基礎的研究が進められた（齋藤 2010）。

（7）ドンソン文化と民族学的担い手についての検討

西村は銅鼓を超えてドンソン文化全体について考察し、それは東南アジア各地域に伝播した文化ではなく、北部ベトナムの南半域を中心にしたローカルなものであり、銅鼓などの器物自体はサーフィン文化北半域集団によって運ばれたことを論じた。また、紀元 1-2 世紀頃の漢文化の大量侵入により、ドンソン文化領域の集団は漢化が進むが、逆にその漢化がベトナム人集団の独立指向を強める助けを果たし、さらには隣接山間部における銅鼓製作伝統が新たに生まれ、それがヘーガー I 式後の銅鼓使用伝統に繋がることを論じた。（西村 2012）

（8）学史的資料の再検討と文献入手

今村は、銅鼓研究の原点に立ち返るため、オランダ、ライデンの国立民族学博物館に所蔵される、銅鼓研究開始当時インドネシアで収集された銅鼓資料、ヘーガーによる銅鼓編年にとって決定的意味を持ったフランスギメ博物館のムーリエ鼓（ソンド鼓）の観察と写真撮影を行い、ヘーガーの研究の先行研究で、日本にはおそらく存在しないマイヤーの銅鼓研究報告書のコピーを作成した。

（9）「銅鼓研究と漢籍史料」

銅鼓研究は 19 世紀後半、西欧・日本の東洋学者たちが競いあいながら、漢籍史料の記述と南中国・東南アジア各地から出土する実物を対比することから始まった。ところが近年になって、各地で出土する実物があまりにも多くなった結果、銅鼓研究は実物の検討に集中し、かつてと比べれば圧倒的に増えた実物のデータによって、漢籍史料の記述を再検

討するという試みは、完全に途絶えてしまった。吉開（2010a）は、その問題提起を図り、新出の銅鼓資料に関わるいくつかの事例をもとに、漢籍史料の記述を再評価しようとした。

（10）中国人・日本人による初期の研究の意義

吉開（2010b、2011、2012）は、助成期間中、新出の銅鼓資料について歴史的に位置付けるため、文献史料の検討と、銅鼓研究史の再検討という二つの側面から本プロジェクトの推進に貢献し、後者の成果として 3 本の研究論文をまとめた。

多民族国家中国では、民族史は自国史を構築する上で重要な柱の一つであり、銅鼓は民族史を解く鍵の一つとして注目されている。中国の銅鼓研究は、西欧・日本など近代列強諸国の学者たちの研究を超克することを出発点とし、中国人ナショナリストたちによって民族主義的見地から独自の研究が進められてきた。彼らが、初めて銅鼓を生み出す土地に集まり、少数民族の世界を体験し、隣接する東南アジア世界を意識し、銅鼓を含む民族史に関する議論をたたかわしたのは、日中戦争下の雲南省昆明の地であった。研究代表者と分担者が 2009 年 9 月に銅鼓調査で昆明を訪れた際に、抗戦下 1940 年前後に当地に疎開していた中国人歴史学者・考古学者・民族学者たちの史料を集め、彼らが実際に暮らし研究を行っていた場所を訪ね、埋もれた民族史研究の成果とその背景を、中国近代ナショナリズム誕生の場を通じて、歴史的に明らかにした（吉開 2010b）。

日本人として初めて中国大陆で銅鼓に触れ、その研究を行なった人物は、鳥居龍蔵であるが、彼が銅鼓に注目したのは、銅鼓が中国南方の苗族が今日も用いる文物で、苗族の

歴史を明らかにする重要な手がかりとなると考えたからである。彼は苗族を、漢族が興隆する前の、中原を含む中国最古の先住民族の末裔として理解していたが、この「漢族西来／苗族先住」説は、19世紀後半から20世紀初めにおいて、西欧東洋学者から明治日本の東洋学者まで、中国民族の起源に関する当時最先端の学説として、世界で広く流行を見ていたのであり、鳥居もその影響を受けた一人だった。そして「太古の民族の末裔」としての苗族についての生の情報源となったのは、実は鳥居の苗族研究、西南中国での苗族調査の成果であった。

鳥居は、西南中国での苗族調査の帰国から間もなく、オーストリアのヘーガーが1902年に刊行した銅鼓分類図録を、入手した。そしてそれを参照し、自らが現地から持ち帰った銅鼓の研究に着手し、近代日本で最初の型式学に基づく銅鼓研究を発表した。やがてその手法は弥生の銅鐸にまで応用され、さらに銅鼓と銅鐸との比較論を通じ、鳥居独自の日本民族史論の構築にまで多大な影響を与えた。

そもそも鳥居がなぜ西南中国で銅鼓に注目したかという点については、苗族を中国最古の先住民族の末裔と見る苗族先住説からの影響に加え、それに先立って東西交渉史への独自の関心から近代東洋学の一分野として銅鼓研究に関心を寄せていた坪井九馬三からの影響があったと考えられる。このように、鳥居の銅鼓研究は、西欧近代東洋学界からの影響に加え、日本国内の学術史的展開からの影響を強く受けたものであったと言えることができる。(吉開 2012)

(11) 銅鼓の型式学的検討と民族の対比

西村(2011)は(7)の研究からさらに時間的範囲を広げ、北部ベトナムで出土しているブ

レ・ヘーガーⅠ式、ヘーガーⅠ式、ヘーガーⅡ式、類ヘーガーⅡ式、ヘーガーⅢ式、ヘーガーⅣ式を通時的に集成し、分布を明らかにした。そして、各時期の文献における銅鼓関係記述や銅鼓使用民族における伝承などを検討して、紀元前3-4世紀のドンソン文化形成期から20世紀に至るまで、銅鼓を使用する集団分布に空間軸上の大きな差異があり、それが現在の民族分布につながることを明らかにした。結果的に銅鼓の丁寧な型式学的編年検討と文献研究、民族学的研究を重ね合わせることにより、民族形成史研究の方法として確立できることを提示した。これは(10)の研究に示されたように、初期の銅鼓研究において民族との関係が主たる問題の一つとして論じられることが多かったことへの回帰といってよいが、単なる回帰ではなく、銅鼓研究のさまざまな分野での研究の成果の蓄積を総合した新たな回帰であり、すでに学史の中に埋もれてしまったと思われることもある銅鼓を通しての民族研究に新たな展開をもたらすものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- ① 吉開将人 2012年「鳥居龍蔵と銅鼓研究」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』査読なし、1号(2012年年内刊行予定、頁未定)
- ② 西村昌也 2012年「ベトナム形成史における“南”からの視点」“西村昌也・篠原啓方・岡本弘道編『周縁の文化交渉学シリーズ6』査読なし、関西大学文化交渉学教育研究拠点、105-141頁
- ③ 齋藤努 2012年「東アジア青銅器と鉛同位体比」『古墳時代の考古学8 隣接科学と

古墳時代研究』査読なし、一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編、同成社、101-108 頁

- ④ 吉開将人 2011 年「鳥居龍蔵の民族論と清末中国知識人」『鳥居龍蔵研究』査読なし、1、129-141 頁
- ⑤ 吉開将人 2010 年「中国民族論と抗戦下の雲南－現地調査報告」『史朋』査読なし、18-41 頁
- ⑥ 今村啓爾 2010 年「ヘーガー I 式銅鼓の南方海域への展開：その年代と歴史的背景」『南海を巡る考古学』査読なし、3-22 頁、同成社
- ⑦ 西村昌也 2010 年「鑄造技術からみたヘーガー I 式鼓に関する考察」『南海を巡る考古学』査読なし、23-52 頁、同成社
- ⑧ 吉開将人 2010 年 9 月「銅鼓研究と漢籍史料」『南海を巡る考古学』査読なし、77-94 頁、同成社
- ⑨ Keiji Imamura 2010 The distribution of bronze drums of the Heger I and Pre-I types: temporal changes and historical background. 『東京大学文学部考古学研究室紀要』査読なし、24 号、29-44 頁

〔図書〕（計 1 件）

西村昌也 2011 年 3 月『ベトナムの考古・古代学』同成社、361 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今村 啓爾 (IMAMURA KEIJI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号 70011765

(2) 研究分担者

吉開 将人 (YOSHIKAI MASATO)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号 80272491

齋藤 努 (SAITO TSUTOMU)

国立歴史民俗博物館・研究部・教授

研究者番号 50205663

西村 昌也 (NISHIMURA MASANARI)

金沢大学・国際文化資源学センター・

研究員

研究者番号 60469236

(3) 連携研究者 なし